

はじめに

アゼルバイジャンにおける 「祖国の南北分断」の歴史認識

石井啓一郎

歴史的な地理概念としての「アゼルバイジャン」は、現在のイランとアゼルバイジャン共和国の国境線に沿って流れるアラス河以南で、イラン北西部アゼルバイジャン三州（東アーザルバーイジャン州、西アーザルバーイジャン州、アルダビール州）の領域に概ね合致している。イランにおける「歴史のアゼルバイジャン」とアラス河以北の南コーカサス（ザカフカース）に現存する「領域国民国家としてのアゼルバイジャン」は、西暦11世紀以後、テュルク民族の北東アジアからの大移動の結果、エスニシティにおいては顕著にテュルク化が進展した。

16世紀以後、サファヴィー朝治下にアラス河の南北はペルシアの版図に包含されるが、18世紀に同朝が滅びた後、ザカフカースはガラバグ、シャキといった小規模なテュルク系ハン王国が群雄割拠する状態になる。一方、従来地域の支配をめぐる角逐を繰り返したイランの王朝とオスマン帝国に、コーカサスから南下政策を進める帝政ロシアも加わり、この地は激しい争奪、係争の舞台になってゆく。

19世紀初頭の二度にわたるイラン・ロシア戦争にイランが敗北し、終戦協定として締結されたゴレスターン条約（1813年）とトルコマンチャーイ条約（1828年）によってアラス河以北のザカフカース領はロシアに帰属が確定した。

この一連の歴史的な流れそのものが、即時「アゼルバイジャン」という領域概念、あるいは国民概念の形成をもたらしたわけではない。元来のイラン領における地理概念が、民族概念ひいては領域国民国家の概念

へ転化するの、20世紀初頭の帝政ロシア支配の末期に、ロシア人、アルメニア人などと並んで地位の平等を求める「ザカフカースの穆斯林・トルコ人」が、自らの民族的な自称概念として「アゼルバイジャン」を冠したときからである。

ロシア革命後の1918年に彼らが独立共和国を宣言したときの国号として選んだのが、「アゼルバイジャン民主共和国」であった。ザカフカースの地名としてアゼルバイジャンの呼称が公式に使用された最初である。以後、ソヴィエトの連邦構成国となり、またソヴィエトが解体した後まで一貫して「アゼルバイジャン」はザカフカースの地名であり続けている。

ザカフカースでこの呼称を国号化・地理的名称化したことは、アラス河の南北にまたがって居住し、同一言語（アゼルバイジャン語）を共有する民族的同胞がふたつに分断されている……そしてアラス河以南のイラン領アゼルバイジャンは「エスニシティにおいて本来ひとつの祖国/南北アゼルバイジャン」にとって未回収のままに残る痛恨の失地である、という歴史認識と共同体史観を結果として形成することになる。その歴史認識の時間軸上の起点は、上記のゴレスターン及びトルコマンチャーイ両条約に遡行する。アゼルバイジャン民主共和国の宣言以後、ソヴィエト時代と独立後を通じてアゼルバイジャン共和国では、文学的にはイラン領アゼルバイジャンの同胞たちが、ベルシア至上主義的な「ショーヴィニズム」の下で理不尽な扱いを受けているとの認識が読み取れる。